

衛藤宗学について

衛藤宗学について何か話せということですが、わたくしと山内先生と総長先生とが、それぞれの立場から衛藤宗学を語るという企画は、大変おもしろいことであり、また有意義なことであると思います。

ただ、わたくしの個人的立場から申しますと、来年の今頃企画して下さると、有り難かったかと思うわけでございます。と言いますのは、御承知かも知れませんが、衛藤先生の遺稿集が、目下編纂されつつあることであります。これは、先生が著述として発表したものを除きまして、先生の大学における講義、各地において為された講演、種々の雑誌、刊行物に寄稿された論稿、これらを集めまして出版する計画が進められていくわけでございます。この内、講演とか論稿は、既に活字化されていますから問題はございませんが、一番の難物は講義筆記の整理でございます。これは、先生の死後、遺族のもとに保管されていた先生自筆の講義草稿を清書する仕事

鏡 島 元 隆

でありまして、鈴木格禅先生と中世古祥道氏のもとで浄写されております。これが終わったところで編纂の仕事が動き出すわけでございます。お二人の仕事も間もなく終わることです。ありますから、来年の今頃になりましたら、わたくしは、先生の遺稿を読み返す機会に恵まれると思うのであります。まして、正確な衛藤宗学の姿を皆さんにお伝え出来るかと思うのであります。目下のところでは、先生の著述を読み返す暇もなく、ただ、記憶を頼りに衛藤宗学の輪郭をお伝えするだけあります。従いまして、大変杜撰なお話になって申し訳ないことですが、わたくしの足りないところは、総長先生や山内先生のお話で補って頂きたいと思っております。

さて、衛藤宗学ということですが、今日では、私たちは当り前のように宗学という言葉を用いておりますが、駒沢大学の講座で宗学という言葉を用いたのは、恐らく衛藤先生が初めてであると思います。それまでは禅学と言いまし

て、宗学とは言いませんでした。忽滑谷先生の『禅学思想史』、岡田先生の『禅学研究とその資料』などの著書が示しますように、禅学の講座はありましたが、宗学の講座はなかったのであります。宗学の講座は、衛藤先生が初めて開かれたのであります。昭和七・八年頃、わたくしは昭和十年の卒業であります。先生が初めて宗学序説の講義を非常な熱弁をもって始められたのが、宗学の講座の最初であります。

この宗学序説の講義の草稿は、どういうものか、今度の遺稿集の中には見い出されません。それは後に、先生が学位論文として京都帝大に提出され、岩波書店から出版されました。『宗祖としての道元禅師』の最初の部分に当たるものであると思います。

ともかく、駒沢大学で、禅宗学ではいけない、宗学でなければならぬと主張されたのは、衛藤先生が初めてであります。

それでは、先生はこの宗学という言葉は何処から用いられたかと申しますと、当時、大谷大学や竜谷大学では、真宗学などの講座が開かれていたのであります。わたくしは、どうも先生は、そこから借りて来られたのではなくて、先生が独自の立場から考えられたのではないかと思えます。もっとも、この点について、先生に確かめてみたわけではありません。先生から、わたくしの思い違いであるかも知れませんが、先生

が、禅学の名称を宗学に改め、これを禅学の中に包摂するのは誤りであるということ、後の『宗祖としての道元禅師』の中で強調しているところでもあります。この意味では、衛藤宗学ということは、先生の学問に最も似つかわしい呼び名であります。ただ、宗学という言葉は、先生が初めて唱え出された頃と、今日とでは、用いられている意味が転化したと思えます。

今日、宗学と申しますと、禅学の中の一つのブランチ (Branch) としての曹洞宗学、臨済宗学もあれば、黄檗宗学もある、それらと並んだ曹洞宗学と考えられているようであります。先生の言う宗学とは、宗教としての道元禅師参究という意味であります。先生の立場からは、道元禅師において、仏教が初めて宗教として完成したのである。その宗教として完成した道元禅師参究ということが、先生の言う宗学という意味であります。従って、先生の宗学は、禅宗学の中の一ブランチ (Branch) としての曹洞宗学ではないのであります。この点は注意を要する点でありまして、後にもまた、触れたいと思えます。

さて、それでは、衛藤宗学の特質はどういうところにあるか、次に二・三の点について思いつくままに述べてみたいと思えます。

まず第一は、『正法眼蔵』に直参することを提唱した宗学

であることであります。よく知られていますように、『正法眼蔵』には多くの註釈がありまして、眼蔵は註釈を通してでなければ分らないほど、難しい書物であります。衛藤先生は、註釈を通して眼蔵を読むことを斥けられたのであります。「分らなくても、分らなくても、自分の力で眼蔵を読め」と言われ、「読書百返、意自ずから通ず。眼蔵は、繰り返し、繰り返し根気で読む書物である。」と、口癖のように言われたのであります。こういう先生の言葉を思い出してみますとき、私達の学生時代には、眼蔵の註釈はそれほど容易に手にすることは出来なかつたのであります。今日では眼蔵のあらゆる註釈が集められまして、容易に見ることが出来るだけでなく、『正法眼蔵』の現代語の訳まで数種類ある状況であります。それが果して眼蔵を学ぼうとする若い諸君にとって、幸いなのか、不幸なのかと、わたくしは考えさせられてしまうのであります。「註釈など一返みんな捨ててしまつて、素手で眼蔵に立ち向う志気がなければ、眼蔵なぞ読むのは止めてしまえ。」と、先生の口を借りて、わたくしも言いたくなるほど、とにかく今日は、眼蔵入門書が余りに過剰にあるように思われるのであります。

それでは、先生はどうして註釈を嫌われたのかと言いますと、これは、眼蔵からじかに響いて来るものに耳を傾けよ。註釈家の目を通したら、その響きが妨げられる。聞こえてき

ても、註釈家の目を通した間接の響きである、ということだろうと思ひます。註釈を頼りに眼蔵を読むとき、陥り易い弊害は、このの所は『御抄』に従う。別の所は『私記』に従うというように、註釈を食い漁つて、適当に繋いで、眼蔵を読むことでもあります。ところが、それぞれの註釈家は、みんなその立場が違つたのであります。従つて、違つた立場の人の言葉を繋ぎ集めても、それはモザイク細工に過ぎません。近頃、山口大学の杉尾氏が、こういう研究に対し、批判を加えられています。先生が註釈を嫌われた理由は、分析すれば杉尾氏と同じ事になるのであります。先生の場合ももっと直接的であり、情感的であつたようであります。

ところで、『正法眼蔵』に直参すると言いますと、当時宗外で盛んであつた、道元禅師研究者は、みんな『正法眼蔵』に直参された人であります。和辻哲郎氏、秋山範二氏、橋田邦彦氏、田辺元氏、みんな註釈を通さずに直接眼蔵に取り組んだ人です。こういう人の研究に対して、先生は非常に好意的でありまして、時には不見識とさえ思われる賛辞を呈しておりますが、それは『正法眼蔵』に直参するといふ先生の立場、『正法眼蔵』を自己の問題として参究するといふ先生の立場と、これらの人の立場とが、その限りにおいて、一致したからだと思います。しかし、眼蔵に直参すると言ひまして、先生の立場は、宗外の人の眼蔵直参とは違つた立

場でありますから、決して先生は、批判を忘れていたわけではないと思います。ただ批判が先行して理解が伴わない、あるいは、理解しようとする立場に對して、先生が常に開いた心を持って臨まれたのであろうと思います。

それでは、眼蔵に直参するという先生の立場が、その限りでは、当時の宗外の研究と一致しながら、先生の立場がそれらの研究と異なる所は何処にあるかと申しますと、衛藤宗学の第二の特質が出てくるのであります。

それは、宗学の基底は仏教にある。仏教の基底は宗教にある。だから、仏教を究めなければ宗学は分らない。その仏教は宗教を究めなければ、仏教は分らないという立場であります。逆に言えば、全ての宗教は仏教に帰するのであり、全ての仏教は宗学に帰するのであります。三角形に譬えて言いますと、宗学はピラミッド型の三角形の頂点であります。その底辺には仏教があり、さらにその底辺には、宗教があるのであります。頂上に登るのには、いきなり頂上に飛び付くことは出来ないものであります。底辺の仏教を究めなければならぬ。その底辺の仏教は、さらにその底辺の宗教を究めなければならぬ、というのが、先生の立場であります。

これがために先生は、先ほど山内先生からも言われましたように、華嚴、天台、真言、法相の仏教学をみんな勉強され、さらに宗教哲学を勉強されたのであります。大学では、

仏教学の講座を担当されながら、宗教哲学の講座をも開かれておりました。

わたくしは先生から、仏教学の講義として『唯識三十頌』の講義を受けましたが、宗教哲学の演習として、ベックの『ブッディズム』の演習を受けたのであります。当時は弁証法哲学や実存哲学が流行した時代でありまして、また、西田哲学の全盛時代でありましたので、私達は、分りもしないで“非連続の連続”というような言葉を振り回したのであります。こういう、哲学を勉強しなければ、道元禪師は分らないという、当時の学生を支配していた雰囲気は、宗外の研究の影響によるものであります。衛藤先生から吹き込まれた熱気に多分に煽られたものであります。

しかし、宗学を学ぶには仏教学を究めなければならない、仏教を学ぶには宗教哲学を究めなければならないという衛藤宗学は、確かにその通りに違いない。そうでなくてはならないということは分っております。これを受け継ぐことは容易なことではありません。これがために衛藤宗学は、私を含めて、後に続く者を出しておりません。これは、先生に對して、甚だ申し訳ないことではありますが、今後の大力量人を待つほかありません。あるいは、将来においても受け継ぐ者が出ないかも知れません。それは先生が、宗学の底辺とした仏教学、さらにその底辺とした宗教哲学が、それを究めるだ

けで一生の問題でありまして、それを究めて後に、道元禪師に帰って来ることは、大量人でなければ出来ないことだからであります。

この点に関し、数年前、宗学研究所で、『宗学と現代』というシンポジウムがなされたことがあります。このとき、宗学の分野では、歴史的研究、または書誌学的研究が盛んであって、思想的研究が遅れているが、この思想的研究の遅れは何故かということが問題となりました。わたくしは、答えを求められて次のように答えたことでもあります。

「宗学の思想的研究が一番遅れているということは、結局、自己の実存を突き詰めて考えないということになると思います。研究者には、早く成果を上げたいという気持ちがどうしてもありまして、成果を上げるには歴史的研究、書誌学的研究が一番手っ取り早いということがあります。わたくし自身が、衛藤先生から『お前は思想的研究をやれ。それがためには華嚴の勉強をやれ』ということを示されたのでありますが、どうも自分自身が不安になって、華嚴をやれば華嚴で終ってしまつて、とても宗学までは行きつけないのじゃないかという危惧感から、この研究が続けられなかったのであります。

どうして思想的研究が立ち遅れているかということは、結局、現代に対する問題意識というものが、非常に研究者に欠

けておること、それから、易きに着くという一つの人間の弱点、こういうことが、思想的研究が遅れているということの理由じゃないかと思えます。自分自身が、挫折してやらないことを申し上げるのは、申し訳ないのですが、若い人達が、一つその領域で奮起して、やっていただきたいと存ずる次第です。」

このように述べたことでもあります。

『正法眼蔵』道得の巻には、中国の雪峰和尚が、雪峰山のほとりの一庵に宿する一僧を勘検する話が出てきますが、この僧は、一本の柄杓で溪川の水を飲むのを習いとしておりました。そこへ、雪峰門下の一僧がやって来まして、この僧に「如何にあらんか祖師西来意」と問いましたところ、この僧は「溪深うして杓柄長し」と答えたということでもあります。先生は、この故事を愛用されました、『正法眼蔵』に対して、「溪深うして杓柄短し」の感を禁じ得ないと、よく言われましたが、この言葉は、そのまま衛藤宗学に当て嵌まるのであります。道元禪師を学ぶには仏教学を究めよ、仏教学を学ぶには宗教哲学を究めよ、という衛藤宗学は、余りに溪が深く、杓柄短しの嘆きを禁じ得ないのであります。

これが、衛藤宗学に、後を継ぐ者が出て来ない理由であろうと思えます。

衛藤宗学の第三の特質は、それが、ロゴスとパトスの葛藤

の苦悶から生まれた宗学であることでもあります。これは、先生の講義に触れた者の、等しく感ずることであると思いますが、先生は、偉大なロゴスの所有者であると共に、偉大なパトスの所有者でありました。このロゴスとパトスは、先生の魂の深い所において、長い間矛盾し、相剋し、先生を苦しめたものと思われませんが、衛藤宗学は、このロゴスとパトスの葛藤の苦悶から生まれた宗学であると思えます。先生の講義が、多くの学生を魅了したのは、この苦悶をまざまざと示す、肺腑について出る言葉でありまして、その意味では、先生の講義は、古今独歩であり、天下無類であったと思えます。

先生はよく、「仏教学盛んにして、仏教衰う」と慨かれましたが、それは、仏教を単なるロゴスとして、先生が研究されなかったからであります。この言葉を他の人から聞きますと、陳腐に聞こえますが、先生から聞きますと、千金の重みを持ちましたのは、先生が、ロゴスとしての仏教学を、大いに学んだはてに生まれた言葉であるからです。わたくしはいつか、「眼蔵世に出でずして眼蔵行なわれ、眼蔵世に出でて眼蔵亡ぶ」という言葉を、この言葉は、栗山泰音禅師の『嶽山史論』の言葉でありますが、先生に申し上げたところ、先生はいかにも「我が意を得た」と、共鳴されたのを憶えております。繰り返し申し上げますが、衛藤宗学は、このロゴスとパトスの葛藤の苦悶から生まれた宗学であります。それ

故に、この苦悶に同情を持たないで、ただ先生の著書を読み、論文を読んだだけでは、衛藤宗学は分らないものがあります。分らないだけでなく、誤解を招くものを持っております。わたくしは、宇井先生の講義を聞きましたが、宇井先生においては、論文にせよ、著書にせよ、宇井先生の人を抜きにしても、それが読み誤まれる恐れは、まずありません。ところが、衛藤先生においては、衛藤先生という人を抜きにして、論文や著述を読んだだけでは、分らないものがあります。それは、衛藤宗学が、ロゴスとパトスの葛藤の苦悶から生まれた宗学であるからであらうと思えます。

以上三点、衛藤宗学の特質について述べましたが、終りに、先生の宗学とわたくしの立場について述べたいと思えます。先にも申しましたように、わたくしは先生から、道元禅師の思想的研究をやれ、それには、華嚴の研究をやれと勧められたのでありますが、とうとう先生の遺囑に背いてしまい、先生に大変申し訳なさを感じているのでありますが、ただ一点、衛藤宗学の一端に繋がるものがあるかと思っているものがあります。それは、衛藤先生のように、宗学をやるには仏教学を究めよ、仏教学をやるには宗教哲学を究めよということとは、わたくしにはとうてい出来ません。せめて、仏教学者の書いたものがわかる、哲学者の書いたものがわかる。そういう開いた心を持ちたいということです。裏を返えせ

ば、わたくしの書いたものが仏教学者に分ってもらいたい、哲学者にも分ってもらいたい、分ってもらえるように書きたいということでもあります。これが、わたくしが衛藤先生から学んだ全てであります。

宗学をやる人には一種のムードがありまして、仲間内だけにしか理解できない言葉を用い、仲間内にだけしか通用しない考え方をする風潮があります。他の人が、それを理解しないのは、体験がないからである、信仰がないからである、とこれを当然と見る傾向があります。わたくしは、これは閉じられた宗学であると思います。わたくしは、宗学が宗乗ではなくて、宗学であるならば、それは誰にも分る、少なくとも、誰にもわかることを目指した開かれた宗学でなければならぬと思います。わたくしの宗学がそうであるとは申しませんが、このような開かれた宗学を目指す者として、多くの点で、わたくしは先生に背きましたが、なお、わたくしは、衛藤宗学の一端につながるものと、自分なりに考えている次第であります。

大変、粗雑な話を致しまして、失礼いたしました。